

仙台大学 広報室

# Monthly Report

## OG小室希選手(仙台大学客員研究員)が全日本スケルトン選手権V6を学長へ報告



左から朴澤理事長・小室選手・鈴木監督・阿部学長＝学長室

2月2日(月)、昨年12月の「全日本スケルトン選手権」に出場したバンクーバー・ソチ五輪日本代表のOG小室希選手こむろのぞみ(仙台大学客員研究員／平成23年仙台大学大学院修了一平成20年体育学科卒一宮城・白石女子高校出身)が、本学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の鈴木省三監督と共に学長室を訪れ、朴澤泰治理事長と阿部芳吉学長に6連覇達成の報告を行ないました。朴澤理事長は小室選手が現在本学の客員研究員であることに触れ、「研究員として更なる研鑽を期待します」と激励し、阿部学長は「努力の積み重ねが素晴らしい記録につながったのだと思います。小室選手の活躍は、被災地を元気にします」と偉業に対する賞賛の言葉を贈りました。

今大会の一本目の滑走で54秒77をマークし、長野市スパイラルのコースレコード(最高記録)を更新した小室選手は、「スケルトンの楽しさを再発見し、達成感を味わえた大会だった。新しいソリとの一体感が深まってきた。技術を試す心の余裕もできた」と振り返り、「昨年の3月から宮城県のタレント発掘事業で、男子中学生へのスケルトンの指導を行っている。必死に頑張る中学生の姿を見て、自分の大きな励みになった。心身両面で充実している」と力強く話しました。

引き続き、小室選手への温かいご声援をよろしくお願い致します。

### < 目 次 >

OG小室希選手(仙台大学客員研究員)が全日本スケルトン選手権V6を学長へ報告	1
第6回仙台大学「管理栄養士合格修練会」を開催—決意を新たに	2
硬式野球部・熊原健人投手(体育学科3年)ら表彰／宮城県スポーツ表彰式	3
本学から海外へ留学する学生2名が学長に挨拶	4
「できる楽しさ」の再発見—平成26年度「スケート実習(盛岡)」	7
羽ばたけ！社会の安全・安心を担う社会人よ！～初めての卒業生を送り出す“現代武道学科”～	9

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

#### 広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email: kouhou@sendai-u.ac.jp

## 第6回仙台大学「管理栄養士合格修練会」を開催—決意を新たに



合格を誓う修練生ら=仙台大学F303教室

2月11日（祝・水）、本学F303教室で、毎年恒例の「仙台大学管理栄養士合格修練会」が開催され、3月の国家試験直前の総仕上げが行なわれました。管理栄養士合格修練会は、管理栄養士国家試験合格を目指す本学卒業生及び卒業後同試験の受験意志のある在学生の学習を支援する会です。

今回の修練会には、本学運動栄養学科の卒業生7名及び在学生2名の計9名が参加。東京アカデミーから講師をお招きし、例年、国家試験で最も配点が高いとされる「臨床栄養学」・「基礎栄養学」・「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」について、重点的に教えて

頂きました。

現在、仙台市高砂学校給食センターの栄養士として勤務1年目の尾崎華穂さん（平成25年運動栄養学科卒—宮城広瀬高校出身）【前列左から2番目】は、「昨年の3月からユーキャンの管理栄養士通信講座で勉強していますが、特に「生化学」や「臨床栄養学」に理解しきれない部分がありました。修練会に参加し、久しぶりに会った仲間と頑張ろうと励まし合いすることで、疑問が解消しました」と話し、決意を新たにしていました。

仙台大学管理栄養士合格修練会主管の早川公康准教授は「最近、資格取得を目指して勉強を始めた人の中に、勉強それ自体に楽しみを覚え始めている様子もうかがわれます。勉強は苦しいことと思われがちですが、発想の転換により楽しみにもなりうるのも事実です。ましてや人の健康に関わる管理栄養士国家試験の内容は幾重にも価値あるものと言い切れます。最後はやはり“絶対に合格するんだ”という執念に尽きると思います。本学関係受験生の大健闘が期待されます」と語りました。

なお、本年度の管理栄養士国家試験は3月22日（日）、合格発表は5月8日（金）に行なわれる予定です。

## 第2回傷害予防講習会を開催



スポーツ傷害の予防について説明する小野新助手=川平A Tルーム

2月3日（火）・4日（水）・17日（火）の3回にわたり、川平アスレティックトレーナールーム（仙台市青葉区）で「第2回傷害予防講習会」が開催されました。この講習会の講師は、本学の小野勇太新助手（アスレティックトレーナーと柔道整復師の両資格取得者）が担当し、アスレティックトレーニング活動の普及と怪我を未然に防ぐ意識を高めることを目的として行なわれました。本学と姉妹校である明成高校の特定研究指定部（男女サッカー部・女子バスケットボール部・陸上競技部）の生徒82名・監督3名が受講され、熱心にメモを取りながら聴講していました。

小野新助手は「生徒たちの怪我の予防への関心の高さを感じる3日間となりました。現状把握を目的にアンケートを実施したので、現場の要望に応えられるような講習内容、特に脱水症や熱中症など、命に関わる講習内容も組み込んでいきたいです」と今後の抱負を話しました。

なお、第1回傷害予防講習会は、上記と同様に明成高校の特定研究指定部の生徒たちに対し、平成26年11月11日・12日に本学の斎藤広子新助手が「脳震盪」について、12月9日に小野新助手が「スポーツと栄養」について実施しました。

### <第1回傷害予防講習会>

NO	日にち	内容	担当者
1	11月11日	脳震盪	斎藤広子新助手
2	11月12日		
3	12月9日	スポーツと栄養	小野新助手

### <第2回傷害予防講習会>

NO	日にち	内容	担当者
1	2月3日	シンスプリント	小野新助手
2	2月4日		
3	2月17日		

## 硬式野球部・熊原健人投手(体育学科3年)ら表彰／宮城県スポーツ表彰式



高橋仁県教育長から特別功績賞の記念盾と賞状を受け取る熊原投手  
＝宮城県行政庁舎講堂

2月14日(土)、宮城県行政庁舎講堂で「平成26年宮城県スポーツ表彰式」が行なわれました。宮城県では、スポーツに関して顕著な成績を挙げた個人及び団体に宮城県スポーツ賞を授与し、その業績を顕彰しています。

本学関係者からは、第1回IBAF21Uワールドカップで準優勝に貢献した硬式野球部の熊原健人投手(体育学科3年－宮城・柴田高校出身)、インチョン2014アジアパラ競技大会陸上女子砲丸投げと円盤投げで優勝した陸上競技部の加藤由希子選手(健康福祉学科3年－

宮城・気仙沼女子高校出身)、第17回アジア競技大会(2014仁川)ボート男子軽量級ダブルスカル

で優勝したOB大元英照選手(アイリスオーヤマ/平成19年体育学科卒－宮城・塩釜高校出身)が特別功績賞を受賞しました。また、ソチ冬季五輪男

子ボブスレー日本代表の黒岩俊喜選手(運動栄養学科3年－神奈川・橘高校出身)、同女子スケルトン日本代表のOG小室希選手(仙台大学客員研究員/平成23年仙台大学大学院修了－平成20年体育学科卒－宮城・白石女子高校出身)、同男子スケルトン日本代表のOB高橋弘篤選手(システックス/平成19年体育学科卒－宮城・富谷高校出身)が功績賞を受賞しました。

表彰式では、受賞者を代表して、本学の加藤由希子選手(同)が「今年の3月で、東日本大震災から4年が経ちます。私も気仙沼市出身で被災をし、地元の方々に喜びを届けたいという強い思いが後押ししてくれました。生まれながら障がいを抱え、トレーニング方法など試行錯誤を繰り返しながらではありますが、精一杯頑張っ

て参りました。この度の賞は、多くの方のご支援・ご指導のお力添えにより頂戴致しました」と感謝と御礼の言葉を述べました。

## 仙台大学大学院スポーツ科学研究科「修士論文・リサーチペーパー」発表会を開催



発表会の様子(写真：発表者・佐藤由佳さん)  
＝仙台大学E301教室

2月13日(金)、本学大学院研究棟E301教室で、仙台大学大学院スポーツ科学研究科の平成26年度「第16回修士論文・第4回リサーチペーパー発表会」が開催されました。

最初に、若井彌一副学長より「限られた時間の中で、自分の目指してきたものが何だったのか。

苦勞したこと・悩みながら進めたこと・力を注いだことなどについても触れて頂ければ有難い。充実した発表会になるよう期待したい」と挨拶され、発表が開始されました。

続けて、修士論文19名・リサーチペーパー4名、計23名の発表(発表時間は、15分/1人<発表10分、質疑応答4分、入替1分>)がありました。発表者たちは、真剣な表情で発表に挑み「東日本大震災後の総合型地域スポーツクラブの変容」や「日中太極拳愛好者の現状に関する研究」、「ハンドボールにおけるディスタンスシュートのシュート分析」などの各23の演題について、事前に準備したパワーポイントで研究の成果を示しながら発表しました。また、発表後の質疑応答でも活発な議論が交わされました。

発表会の最後に藤井久雄大学院研究科長から「自分の研究内容を理解していない人たちに意義や価値を知らしめることは重要なこと。修士論文やリサーチペーパーで努力した経験を生かし、活躍の場を広げてほしい」とエールが送られ、発表会が締めくくられました。

## 本学から海外へ留学する学生2名が学長に挨拶



石澤さんと石橋さんを囲む大学関係者＝学長室

2月17日（火）、デンマーク・ノアフェンス国民大学いしざわゆなに1年間留学する石澤佑奈さん（運動栄養学科2年一宮城・名取高校出身）【左から3番目】と中国・上海体育学院いしばしこうきに4年間国費留学する石橋広育さん（体育学科4年一栃木・作新学院高校出身）【右から3番目】が、本学国際交流センター長の高橋まゆみ教授【右から2番目】、事業戦略室の渡邊一郎室長【右端】、大学院事務室の馬冬梅職員【左端】と共に学長室を訪れ、

阿部学長に出発前の挨拶と留学に向けての抱負などを話しました。

管理栄養士を目指している石澤さんは「“世界一幸せな国”と言われているデンマークで、語学を学びながら、先進的な福祉制度や幸福大国の食文化などを学び、海外でも活躍できる人材になりたいです」。体育教師を目指している石橋さんは「体育科教育か運動生理の日中比較研究を試みたいと思っています。2020年東京オリンピック・パラリンピックで、中国人選手の通訳者として、オリンピックに携わることも目標です」と話しました。

仙台大学は、スポーツ科学を中心とした分野で、中国や台湾、韓国、フィンランド、ドイツ、デンマーク、アメリカ、タイ、ベトナム、パラオ、ベラルーシといった数々の海外の大学等と交流し、学生に豊かな学びの機会を提供しています。国際感覚を身に付け、国境を越えて人々をつないでいく人材を育てていきたいと考えています。

## 「平成26年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」を開催



大河原町の齋教育長から感謝状を受け取る小林さん（右）＝仙台大学

2月23日（月）、本学第五体育館大教室で「平成26年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」が開催されました。小・中学校での学習支援や部活動支援、特別支援学校での障害児活動支援などを行なった本学学生全員の名前が読み上げられ、仙台市・柴田町・大河原町・岩沼市・大崎市・名取市・角田市の各教育委員会の担当者から学生一人ひとりに感謝状が手渡されました。

感謝状贈呈式で名取市教育委員会の瀧澤信雄教育長

は「仙台大学さんには震災直後でご苦労がある中、体育施設を借用させて頂いたり、貴学の荒井龍弥教授に名取市立みどり台中学校校長として3年間出向して頂いたり、これまで大変お世話になりました。学生ボランティアの皆さんは、子どもたちのために積極的に取り組んでくれて本当に助かっています」。大河原町教育委員会の齋一志教育長は「教育現場は猫の手も借りたいほどです。学校教育には様々な課題がありますが、その中でも学力向上が一番重要視されています。仙台大学の学校支援ボランティアの学生さんには、子どもたちの学力向上のきっかけをつくっていただきました」と感謝の言葉が述べられました。

こばやしひろき

学校支援ボランティア学生を代表して、小林弘樹さん（健康福祉学科4年一群馬・東京農業大学第二高校出身）が「学校支援ボランティアの活動を通して、自分自身が成長していったように感じています。学校現場でのたくさんの経験を生かし、子どもたちの気持ちの分かる教師になりたいです」と力強く挨拶を述べました。

なお、今年度は、仙台市74名・柴田町21名・大河原町12名・岩沼市26名・大崎市2名・名取市41名・角田市13名の計189名の学生が感謝状授与者となっております。



## 平成26年度学生相談室主催研修会「不登校が学校教育に問いかける意味」



平成26年度学生相談室主催研修会が平成27年2月17日（火）13時30分から約2時間にわたりF303教室で開催されました。大阪市立大学名誉教授・大阪樟蔭女子大学名誉教授・鳴門教育大学特任教授の森田洋司先生を招き、教職員と教職を目指す学生あわせて約40名が聴講しました。

森田先生は、いじめ・不登校などの青少年問題や教育問題を通し、現代社会の病理現象を研究なさっています。また、文部科学省の「不登校に関する調査研究協力者会議」の座長を務められています。今回の研修では、不登校はきっかけ探しよりも、学生の対処する「力」を育てていくことが大切であること。不登校は誰でもなる可能性を持っており、本格的な不登校にな

る前の「3日休み」の段階で教員からの連絡や「7日休み」で対応を開始すること。

また、つらいことがあっても学校に通う理由となる「教員」「友人」「部活」「居場所」といった、社会的絆 (social bond)を増やしていくことの大切さについて熱弁を振るわれました。

また、不登校は「熟成」の期間でもあり、乗り越えた人が持つ危機対応への能力は、不登校を経験していない同年代よりも素晴らしいものであることが紹介されました。

質疑応答の時間も設けられ、「機能不全家族の社会の繋がり方の難しさがある」との教員の質問に対し、「成績に関わらないSCや養護教諭が社会資源の入り口になる大切さ」と、「約束が裏切られ続けても関わり続けることを、教職員全体が共通理解として持つことの大切さ」を指摘されました。

最後に、日本の社会は95点を取ったら、100点を取れないことを指摘する減点社会。そうではなく、いつも0点を取っている人が5点取れたことを評価する加点社会になっていくこと、その生徒の良いところを見つければ、生徒が伸びていくとお話がありました。重くなりがちの不登校の話題を軽快な語り口で講演して頂き、教職員や教職をめざす学生にとって有意義な学びの場となりました。

<報告：学生相談室 石澤和子>

## 平成27年仙台大学同窓会沖縄支部総会



1月24日（土）に那覇市新都心で開催した「仙台大学同窓会沖縄支部総会及び新年会」には、仙台大学の阿部芳吉学長・仙台大学同窓会の鈴木省三会長・仙台大学同窓会の大河原則夫事務局長のご臨席を賜りました。

10数年ぶりの総会でしたが、遠くは離島の石垣島や宮古島、本島北部など遠方からの参加者も多く、35名の同窓生が駆けつけてくれました。また、部活動や学校行事等で参加できないと残念がっている

同窓生もおり、まさに平成27年スタートにふさわしい盛大な総会及び新年会になりました。同窓会総会や臨時総会での同窓会法人化に向けた大学側の取り組みや理由等の説明があり、学生を救う動きなど、沖縄に居ては入ってこない情報等が聞け、大学側の学生を思う取り組みに皆、より一層仙台大学同窓であることを誇りと思い感激していました。

ここ数年、仙台大学出身者の教員採用試験合格者が続いております。少しずつではありますが、確実に沖縄県の学校現場に船岡の地で学生時代を過ごした仲間が増えていることを皆で共有できた喜びは格別でした。多くの仲間と語り、今後はより一層、先輩・同輩・後輩の絆が深まるのを実感しつつ、極めて有意義なひと時を過ごすことができました。

母校仙台大学の益々のご発展とご隆盛を心より感謝申し上げます。

<報告：仙台大学同窓会沖縄支部長

まだんばし かつひこ

真玉橋 克彦（平成3年体育学科卒）>

## 「できる楽しさ」の再発見－平成26年度「スケート実習(盛岡)」



平成26年度の「スケート実習」が、岩手県盛岡市の「岩手県営スケート場」にて2月16日から19日の3泊4日の日程で実施された。

今年度のスケート実習は履修登録者の増加に伴って、夏1回、冬3回に分散して行われ、今回の盛岡実習には101名が参加し、フィギュアスケート6班、スピードスケート1班、アイスホッケー4班の3部門に分かれて実習に取り組んだ。フィギュアとスピード部門には現地のベテランスタッフ（岩手県スケート連盟普及部）の方々と補助学生が各班ごとに指導にあたり、アイスホッケー部門は引率教員と補助学生が指導にあたった。

初日から晴天となり気温も暖かかったため、屋外であるリンクの氷が溶けだし危険な状況もあったが、二日目以降は雪や小雨が降ったりしたものの、冷却をフル稼働させたこともあり大きな問題なく滑走できた。

全日程で好条件とは言えないコンディションではあったが、学生は体育大生らしく「うまくなる」をスローガンに積極的に取り組んでいて、目覚しい上達ぶりが印象的であった。

参加学生の大半がスケート初心者で、最初は氷の上に立っていることすらやっとの状態の学生も多かったものの、次々と課題をこなしていくことで徐々にコツをつかみどんどんと上達していった。全く馴染めずに途方にくれていた学生も、指導スタッフや補助学生のマンツーマンの指導とその熱意に勇気付けられて所定の課題をクリアすることができた。

実習後には素晴らしい温泉が待っていて、夜だけでなく朝食前に朝風呂を楽しんでいた学生もちらほら。最終日前の夜は筆記テストを終えた後にスタンツ大会で、学年、学科の枠を超えて大いに盛り上がった。最終日には実技試験を兼ねたバッジテストが行われ、フィギュア部門は全員、その他の部門でも希望した実習生全員がC級バッジテストに合格し、資格を取得することができた。さらに今回は補助学生もB級試験に受験者全員が合格した。他にも、記録会、マッチと3日間の成果を存分に発揮して実習全てが終了した。締めくくりに、帰路での昼食わんこそば決戦で、特に女子の食べっぷりは今後の競技での活躍を期待させるほど豪快で、大いに大盛り上がった。

このスケート実習は補助学生にとってはコーチング理論の実践の場にもなっていて、教育実習と同様に、実際に指導することの難しさを実感し貴重な経験を積むことが出来たようです。実は彼らは1年前に「うまくなる楽しさ」をはじめて味わった実習生だったそうで、この実習をきっかけに本格的にスケートに取り組み始め、見本が披露できるというだけでなく、「できそうもない」感覚を持つ学生の良き理解者として強力な手助けとなっていました。

3月には仙台でアイスホッケーコースの最後の実習もあり、毎年、新たな企画にチャレンジするための準備は大変なもの、反省会で出た改善点などを検討し、今後益々良い実習になるよう努力していきたいと思います。

＜記事・写真：川口鉄二教授、濱田裕二新助手提供＞

## 全日本スケルトン選手権初優勝のOB笹原友希選手が来校



全日本スケルトン選手権の表彰式の様子＝長野市スパイラル  
※写真中央：OB笹原選手

2月18日（水）、昨年12月に行なわれた「全日本スケルトン選手権」で初優勝を飾ったソチ五輪日本代表のささはらゆうきOB笹原友希選手（平成19年運動栄養学科卒―秋田中央高校出身）が、広報室を訪れました。

笹原選手に、初優勝の心境や今後の課題、抱負などについてお話を伺いました。



### 初優勝の心境は―

スケルトン歴11年目で、初のタイトルを獲得しました。今までは、勝ちたい気持ちが空回りしていました。今回、長野市スパイラルのコースレコードも大幅に更新することもでき、とても嬉しい気持ちです。

### 原動力は―

ソチオリンピックで結果を残せなかった、自分の力を最大限に発揮できなかった悔しさが、スケルトン人生を送る上での原動力になっています。

### 課題は―

今までは、メンタル面が大きな課題となっていました。今回、全日本で初優勝して、メンタル面は克服できたと感じています。今後は、プッシュタイムを伸ばし、世界との差を縮めて、世界と戦える選手になりたいです。

### 今後の抱負は―

次の平昌オリンピックでは入賞（8位）が目標です。来年のワールドカップ（全8戦）では、年間総合ランキングでTOP10入りを目標に掲げ、日々練習に励んでいきたいと思っています。

## さらなる飛躍を誓う／平成26年度柴田町スポーツ賞表彰式



学生達の受賞を祝福する阿部学長（中央）  
＝槻木生涯学習センター（柴田町）

2月27日（金）、平成26年1月～12月までの間にスポーツで顕著な成績を挙げた個人及び団体を表彰する「平成26年度柴田町スポーツ賞表彰式」が柴田町の槻木生涯学習センターで開催されました。

本学関係者からは、女子フロアボール部・漕艇部・体操競技部・男子サッカー部の4団体と12個人（硬式野球1名・陸上競技1名・フロアボール3名・漕艇2名・ボブスレー1名・スケルトン1名・柔道2名・体操競技1名）が受賞しました。また、同表彰式には、本学の阿部芳吉学長も来賓として出席しました。

柴田町スポーツ功績賞を受賞したボブスくろいわとしきレー・リュージュ・スケルトン部の黒岩俊喜主将（ソチオリンピックボブスレー男子4人乗り26位／運動栄養学科3年―神奈川・橘高校出身）は、「今回の受賞を糧にし、さらに心・技・体を磨き、人間的にも成長していきたいです。少しでも気を抜いたら次のオリンピック出場はできないと思います。シーズンオフになりますが、大事な時期なので、トレーニングに励み、しっかり身体を鍛え上げたいです」。

柴田町スくどうちかポーツ奨励賞を受賞した女子柔道部の工藤千佳主将（全日本学生柔道体重別選手権大会女子57kg級第3位／現代武道学科3年―青森・五所川原農林高校出身）は、「この賞を励みに、また明日から頑張っていきたいと思っています。今年は大生活最後の年です。悲願の団体戦大学日本一と個人戦3位以上を目指します。何事にも逃げずに、諦めずに頑張って挑戦していきたいです」と力強く話し、今後のさらなる飛躍を誓いました。

柴田町スくどうちかポーツ奨励賞を受賞した女子柔道部の工藤千佳主将（全日本学生柔道体重別選手権大会女子57kg級第3位／現代武道学科3年―青森・五所川原農林高校出身）は、「この賞を励みに、また明日から頑張っていきたいと思っています。今年は大生活最後の年です。悲願の団体戦大学日本一と個人戦3位以上を目指します。何事にも逃げずに、諦めずに頑張って挑戦していきたいです」と力強く話し、今後のさらなる飛躍を誓いました。

## 羽ばたけ！社会の安全・安心を担う社会人よ！

### ～初めての卒業生を送り出す“現代武道学科”～



仙台大学体育学部に5つ目の学科誕生

## 現代武道学科

社会の安全・安心を護る人材を育成

今年3月の卒業式で初めての卒業生が現代武道学科に誕生する。その総勢は30数名余。彼らは、教員として、警察官として、国を守る自衛官幹部として、全国展開する警備会社の基幹的な職員として、また、学んだ武道をベースに多彩な職業人として、社会に新たな一歩を踏み出す。

現代武道学科は4年前に本学に新設されて以来、文字通り、文武両道を目指し、学生・教員が一体となって、学業に、剣道・柔道・各種スポーツ・その他サークル活動に取り組んできた。この一体的取り組みを、現代武道学科では“チーム現代武道”と呼んだ。

#### (1) “チーム現代武道”…揃った多彩な顔ぶれの教員

まず、多彩な教員の顔触れが揃った。剣道界最高段位をもつ剣道八段の齋藤学科長、オリンピックでメダル獲得を！という重責を担う全日本女子柔道チームの南條充寿監督、全日本柔道選手権への東北代表として活躍する仲田助教、警察の世界で名を轟かす制圧術の第一人者伊藤教授、トップアスリートとしての挫折を経験に実践的なスポーツ心理学を教授する菊地准教授などの武道系・スポーツ科学系の教員に加え、社会の安全・安心の確保を担う警察の第一線での実務経験を有する飯塚教授、警備業関係研究の第一人者の田中講師、元高等学校校長経験を有する教職の太田教授、国際的に活躍したジャーナリストの高成田教授、日本国憲法の加藤教授、元東北大学教授の佐藤滋教授、そして中央の行政や国連機関での政策立案経験をもつ私などの経歴・職歴を有する教員がタッグを組んで本学科での新しい課題に取り組んだ。

但し、その道のりは平坦なものではない。試行錯誤の連続であった。

#### (2) 二つの明確な目標を掲げての船出…「武道の指導者」と「社会の安全・安心を担う人材」の養成

現代武道学科は、極めて明確な卒業後の目標を持って出発した。それは、二つである。まずは、新たに剣道や柔道等の武道が中学校で必修になったことから、これらを担当できる体育教員を育て輩出することである。勿論これには市井における武道の指導者の養成も含まれた。

次は、武道を学び、その応用展開としての制圧術等を修得し、更には、これらの実技の体得を踏まえ社会の安全・安心の方策を学ぶことである。そして、警察官、消防士、刑務官や自衛隊の基幹的隊員、警備業で基幹的な役割を担う人材といった、いわば、“社会の安全・安心を担う者”としての道を追求することである。

#### (3) 4年先を見据え！先ず、全員で取り組んだ基礎学力固め

入学試験を終えて入学した学生がまず直面したのは、アツと驚くテストであった。それは、プレズメント・テストという学科独自の英数国の3科目の試験である。これで学科の学生は、まず、将来、社会人になるために必要な学力のチェックを受け、また、大学での講義を受けるに当たり、基礎学力がきちんと身に付いているかを厳しく点検された。そして、その後、ゆとり教育の弊害を克服すべく、リメディアル教育がキャリアプランニング関係科目の中で展開された。

これはその後、学科独自の学習会に引き継がれ、3年次から本格化する教員試験の準備や公務員試験・民間の入社試験のための教養試験への対応のベースともなった。それだけ



学習会の様子

にとどまらない。4年生になって卒業論文の作成が必須だが、その際の考え方や論理構成、文章の記述の仕方などの修得の基礎づくりにも役立つとする学生も多い。

#### (4) 4年間、みっちり取り組んだ武道の稽古、そして、楽しかった海外武道実習

“武道”修得の面での活動も顕著である。入学する学生には、剣道や柔道の経験を不問に付した。但し、4年間にみっちり武道に習熟する道を準備した。それは、剣道、柔道、空手道、合気道の修得を必修とし、体力と技を身に付けさせるのみならず、武道の稽古は「身体の内側を

見つめ、危機の感知能力、気の感応力を養う「修練の道」であることを体で学んでもらうこととした。

また、海外の武道として、テコンドー、太極拳、中国武術などを学ぶことや韓国で行う海外武道実習にも力を入れた。これは本学科の学生にとって異なる社会習慣・文化を背景とする武道に触れることを通じ、広い世界を見つめるよき契機ともなった。更に、その過程で隣国の学生と強い絆をも築く機会を齎した。



応用武道実技 I



海外武道実習(韓国・龍仁大学)



中国武術



韓国伝統武道(テコンドー)

## (5) 新しい羅針盤…本学科独自のテキストでの講義の展開

現代武道学科の学問領域には、これまでの体育・スポーツ健康科学の領域の大学教育では必ずしもカバーされていない分野も多く含まれていた。従って、学科誕生後の4年の間で、学科独自のテキスト作りが注がれた。それは、伊藤重孝教授の『安全安心の礎』(2012.4現代武道学科教育研究会)、齋藤浩二教授の『武道の必修化に伴う体育実技(剣道)指導』(2013.3現代武道学科教育研究会)及び遠藤保雄・荒木二郎・森惣一・田中智仁の4先生の講義録『社会の安全・安心概論』(2014.8仙台大学体育学部現代武道学科)という形で結実した。これらのテキストは、学生にとり本学科での講義内容の理解を深めていく上で、一つの新しい羅針盤となっている。



伊藤重孝教授の『安全安心の礎』(2012.4現代武道学科教育研究会)、齋藤浩二教授の『武道の必修化に伴う体育実技(剣道)指導』(2013.3現代武道学科教育研究会)及び遠藤保雄・荒木二郎・森惣一・田中智仁の4先生の講義録『社会の安全・安心概論』(2014.8仙台大学体育学部現代武道学科)という形で結実した。これらのテキストは、学生にとり本学科での講義内容の理解を深めていく上で、一つの新しい羅針盤となっている。

## (6) 新学科発足直後、直面した3.11東日本大震災…その被災に負けず・めげず!

顧みれば、本学科に入学した学生にとっての初年度は、「3.11東日本大震災」という未曾有の大災害からの復旧への戦いに始まった。学生の多くは復旧に向けボランティア支援に立ち上がった。但し、ある学生は自分自身の家が被災し途方に暮れた。

その中の一人の薬師神さんは宮古の実家が津波で流され、今後どう学生生活を送っていくべきかという困難に直面した。その時、彼女を強く支えてくれたのは予期せぬ支援であった。それは遠い異国から差し伸べられた温かい支援の手である。ミラノ近くで道場を開くイタリア人の柔道家が、途方に暮れる彼女に「あなたにとっては柔道という大きな財産があるではないか」とヨーロッパでの柔道の修業に招いてくれた。以来、3度にわたりイタリアで修業を積んだ。卒業を控えた今、彼女は言う。「イタリアに渡り柔道をする事で、イタリア人が重視している“日本古来の柔道の精神”を改めて見つめ直した。…卒業後も働きながら実業団クラブで柔道を行う決意を固めるきっかけになった」

## (7) 多方面に雄飛する卒業生…真剣に向き合ってくれた教員とのぶつかり稽古

そして、2015年3月、2011年に入学した本学科30名余の学生は一期生として卒業を迎える。卒業生の進む先は多様だ。宮城県警、神奈川県警、千葉県警、警視庁などの警察官として7名、自衛官4名、刑務官1名、小学校教諭1名、セコム、アルソック、全日警、セノンなどの警備企業へ11名、一般企業3名などがこれに含まれる。この数は就職希望者の96.4%に上る。このように高い就職実績を挙げているのは、チーム現代武道の教員が各専門分野を担当し教育課程外で学習講座を継続的に開講し、特に、警察官OBの飯塚先生を中心にして専門性をもった指導体制が実を結んだものだ。



新卒業生は、真剣に向き合ってくれた教員の胸を叩き・ぶつかり稽古で学んだ。

## (8) 厳しい前途…教員への道! 教職に27年度再挑戦する新卒業生よ! 頑張れ!

一方、卒業を心から祝える形で迎えられる学生ばかりではない。教員試験に挑戦し一次試験は合格したが、二次試験で合格できず、中学校で保健体育の講師をしながら、27年度に再挑戦する新卒業生だ。そこには厳しい前途が待ち受けているだろうが、一度決めた道…。彼らにとっては、この4月から教育現場で実践的経験を積みながら、決めた道の実現に向けた努力が始まる。彼らに対しては、本学科の期待の星として、今後とも、陰に陽に何らかの形でチーム現代武道は支援していくことを誓っている。

羽ばたけ! 現代武道学科卒業一期生…。社会の安全・安心を担う社会人として!

< 寄稿 : 現代武道学科教授 遠藤保雄 >

(写真提供: 現代武道学科GM 中鉢芳尚)